

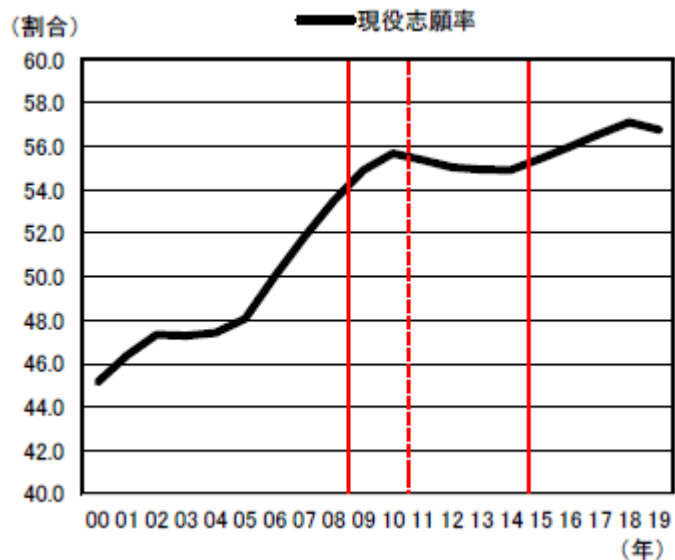
舟入高校第3学年進路だより No.6

1. コロナ不況で大学入試はどうなるのか？

新型コロナウイルスにより、経済状況が悪化しています。このとき大学入試、大学進学はどのくらい影響があるのでしょうか。景気の低迷期として、リーマンショックと東日本大震災のころが挙げられます。そこで、当時（ここでは2009年～2014年ごろとする）の大学入試はどうだったのか見ていきたいと思います。

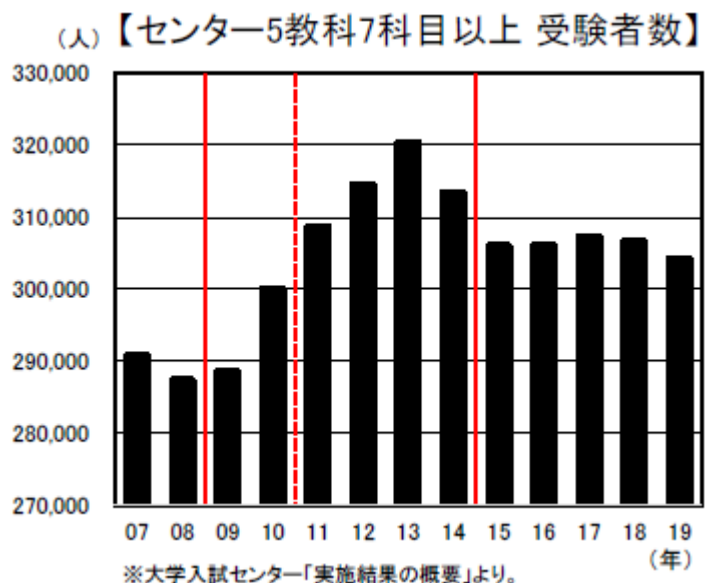
現役志願者率の低下

2009年～2014年は現役志願者率が低下しました。厳しい家庭の経済状況から大学進学を断念した高校生がいることがうかがえます。日本では平成に入ってから、基本的に現役志願率は上がり続けていました。経済の悪化はその勢いを抑え込むほどの大きな力があることがわかります。



国公立大学志向の上昇

2009年～2014年は国公立大学志向が強まりました。右グラフは、国立大の典型的な受験パターンであるセンター試験7科目以上の受験者数を表しています。2008年から大きく増えていることがわかります。このことから「国公立大学に行きたい」という受験生は多くなったと思われます。



安全志向の上昇

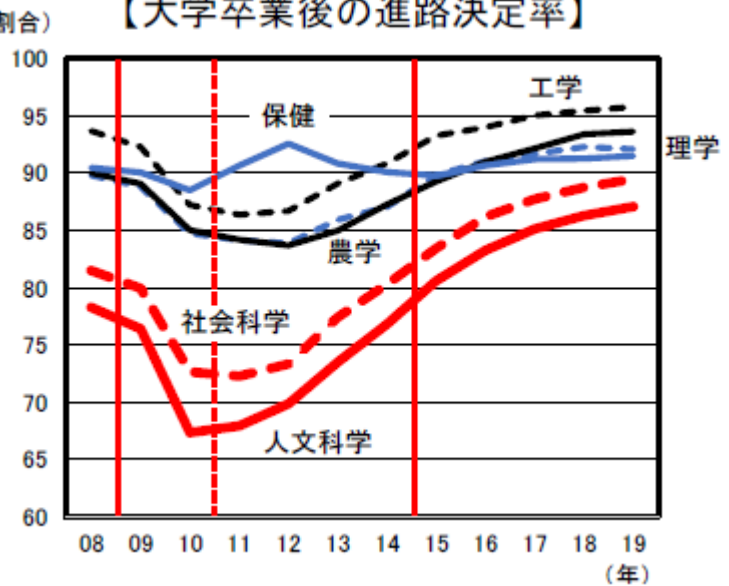
2009年～2014年は安全志向が強まりました。当時の入試分析記事は次のようになっています。

2009年：難関、準難関大敬遠。地方の公立大人気。
2010年：公立大は志願者の大幅増続出。
2011年：中堅上位さえも敬遠。
2012年：公立大はここ数年の人気で倍率上がりすぎ。
2013年：「難関→準難関→中堅→地元公立」にランクダウン。
2014年：翌年新課題入試から「後がない入試」→慎重出願に。

進路決定率の変化

進学決定率とは、大学卒業者における「就職」または「大学院進学」した者の割合です。これ以外はアルバイトや専門学校、進路未定の者などになります。グラフから文系学部が大きく落ち込んでいることがわかります。経済状況が悪ければ文系学部は就職難」ということを印象付ける結果となっています。

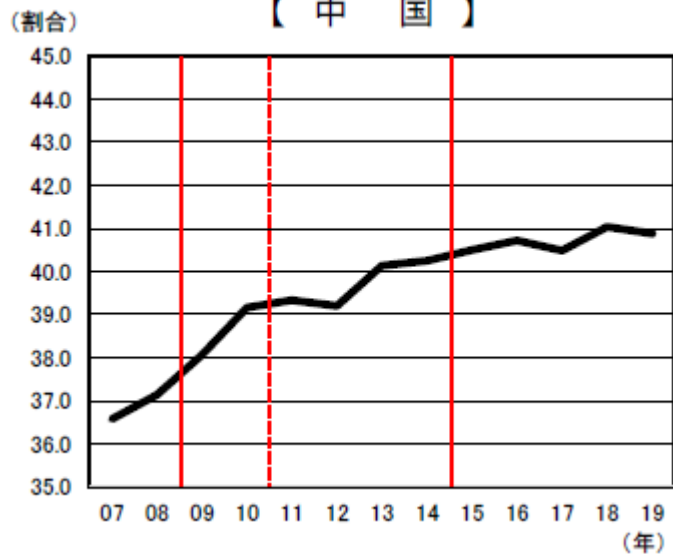
【大学卒業後の進路決定率】



地元志向の上昇

2009年～2014年は「できれば地元」という地元志向が強まりました。しかし、国立大学志向、安全志向、就職不安もあり、すべての条件を満たすのは容易ではありません。また大卒後の就職が地元で見込めない、取りたい資格の学部が地元がないという理由で県外に出る受験生も一定数いたと思われます。

【中国】



今回の特異性

今年度はこれまでと大きく違う点として「新入試」が挙げられます。問題の難化、配点の変更などでそれまでなかった状況の変化が起こる可能性が考えられるので、注意しなければいけません。